

Title	金融機関のリスク・マネジメントにおけるVAR (Value at Risk) 適用の意義-生命保険会社の金融部分をモデル化して-
Sub Title	
Author	チヨ, ヨンク(Chiyo, Yonku) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1997
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1997年度経営学 第1357号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001997-1357

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金融機関のリスク・マネジメントにおける VAR(Value at Risk) 適用の意義

—生命保険会社の金融部分をモデル化して—

現在生保は、総合的なリスク・コントロール体制の確立が重要な課題となっている。金利リスク管理が中心となって、現在多くの金融機関で行われているALMは、生保にあてはめるにあたっては、多くの制約と限界が見られる。近年行っているリスク・マネジメントは、リスクの最終的な拠り所を収益変動のバッファとなる自己資本に求めるというのが基本的な枠組みとなっている。そうした意味で各種のリスク・ファクターを勘案した上で、予想される損失額の形でリスク量を表現する指標であるVAR(Value at Risk) は方向性として有意性があると考えられる。

本稿では生保のリスクに対する認識は「資産運用収益率が予定利率より低くなる危険」であると位置づけた。それに関わるリスクの種類は金利リスクと株価などの価格変動リスクがメインとなっている。そうしたリスクに対するマネジメント手法として取り上げたモデルが、「VAR概念を導入した資産最適化モデル」である。そのモデルの仕組みは、キャッシュフロー法のようなダイナミックな考え方と現代投資理論(MPT)の最適化アプローチのすぐれた点を活かしながら、その制約を踏まえて作り上げた。同時にリスク把握のツールとしてはリスクの計量化モデルであるVARの概念を導入した。

最適化の制約条件として予定利率を組み入れることによって、ただ資産だけの最適化ではなく負債のコストを勘案した最適化モデルになった。いわゆる、ALMの考え方の観点で接近したモデルである。そうしたモデルの中に日本の大手生保に関わるデータをインプットさせ、シミュレーションを行った結果、今後5年間における生保の最適ポートフォリオが導かれた。

本研究における最大の成果は、あまり複雑すぎるALM的なリスク・マネジメントを簡単に構築できたことと、リスクを計量化させたことであると考えられる。また、モデルの中でランダム・ワークによる金利予測モデルを組み入れることによって、よりダイナミックなリスクマネジメントが可能となったことである。